

# マリア・カラス 最後の恋

2007(平成19)年12月19日鑑賞(東映試写室)

★★★



監督＝ジョルジョ・カピターニ／出演＝ルイーザ・ラニエリ／ジェラルド・ダルモン／アウグスト・ズッキ／セレナ・アウティエリ／ガブリエーレ・フェルゼッティ／アンナ・ヴァッレ／特別出演＝シドニー・ローム（ヘキサゴン・ピクチャーズ、シナジー配給／2005年イタリア映画／117分）

…… 20世紀を代表する歌姫マリア・カラスが36歳の絶頂期に知り合った、海運王オナシスとの「最後の恋」を描く物語は魅力いっぱい。いくら華やかな世界に生きていても、女は女……？ カラスは普通の女としての幸せを求めたのだが、それは所詮ムリ……？ 名曲の数々と絢爛たる上流階級の人たちの交わり、その中に見るカラスの女心と純真な愛……。『エディット・ピアフ 愛の讃歌』（07年）と共に、歌姬たちの生きざまと恋の展開模様をタップリと味わいたいものだ。

## 第4章

ひとつとして同じ人生などない

### 『永遠のマリア・カラス』 vs. 『マリア・カラス 最後の恋』

マリア・カラスの生誕80周年を記念した『永遠のマリア・カラス』（02年）は、1974年11月11日の日本公演を最後に51歳で事実上引退したマリア・カラスがその後、歌劇『カルメン』の主役にチャレンジするという物語だった（『シネマルーム3』189頁参照）。これに対してこの映画は、そのタイトルどおり、マリア・カラス（ルイーザ・ラニエリ）と海運王アリストテレス・オナシス（ジェラルド・ダルモン）との最後の恋を描くもの。「世界で最も有名な2人のギリシャ人の1人」と豪語する大富豪オナシスの名前は有名なうえ、マリア・カラスとの間のロマンスが世界中を賑わしたことも有名。マリア・カラスがオナシスとの間で恋におちたのは1959年、彼女が36歳の時。もちろん、オナシスには妻ティナ（セレナ・アウティエリ）と長男アレクサンダー、長女クリスティーナの2人の子供がいたうえ、マリア・カラスには夫ティッタ・メネギーニ（アウグスト・ズッキ）がいたから、これは公然とした不倫関係。

## 少女時代のマリア・カラスは……？

「世界最高のプリマドンナ」マリア・カラスは栄光に包まれているため、その不遇な少女時代を知る人は少ないはず。しかしプレスシートによれば、「ピアノが上手なすらしとした美少女の姉に比べて、マリアは美声の持ち主ではあったが愛嬌のない肥満児だったとか。そのために特に母親からはあまり愛されず、姉とは常に比べられるのでみじめな少女だったというのが通説である」とのこと。また、「実際、無名時代の彼女は100キロ級の巨漢だったよう」。

カラスの最後の恋に焦点をあてたこの映画は、彼女の絶頂時代の36歳の時に、オナシスと運命的な出会いをするところが実質的な物語のスタートだが、少しだけ無名時代のカラスが登場する。もちろん、それを演ずる女優はルイーザ・ラニエリではないが、彼女がオーディションで放つ美声と歌唱力は審査員とその横に座るメネギーニを驚愕させたらしい。

カラスとメネギーニとの年齢差は約30歳。しかし、そんなハンディを乗り越えてメネギーニと結婚したカラスは、公私にわたるメネギーニの協力を得て、人気はうなぎ上り。それを決定的にしたのが、メネギーニの協力による徹底したダイエット。今や「100キロ伝説」は過去のものとなり、30キロ以上減量した美しいマリア・カラスは世界最高のオペラ歌手、ソプラノ歌手に成長していくことになった、が……。

## オナシスの恋のテクニックに脱帽……

この映画はマリア・カラスが主役だが、男の私が観ていると、むしろ恋の展開においてはオナシスの方が主役ではないかと思うような自信満々のオナシスの姿と、彼が見せる恋のテクニックの見事さに脱帽させられてしまう。豪華なクリスティーナ号による地中海クルーズへのご招待、イギリス首相チャーチル夫妻の同乗、夜毎の船上でのパーティー、寄港地ごとのすばらしい歓迎。そんな夢のような世界はすべてオナシスの財力と計算された人脈の中でつくり出されたものだが、それでも心地良いことはまちがいない。

カラスを一目見た時から「必ずモノにしてみせる」と何とも無礼な言葉をはいたオナシスを当初は無視していたにもかかわらず、地中海クルーズが続く中、カラスの心はメネギーニから離れ、今やオナシスにメロメロ。もっとも、私の観る限り、オナシ

スの「カラスを愛している」という言葉にはウソはないよう。つまり、カネは大切だが、やはり最後は誠実さ。もっとも、かつては「征夷（誠意？）大將軍」と呼ばれていた羽賀研二が詐欺罪で逮捕されてしまったように、オナシスのカラスに対する愛と誠実さがいつまで続くのかが大問題。オナシスのように征服欲の強い男にとっては、ターゲットを手に入れるまでが楽しみで、実際に手に入れてしまうとすぐに飽きて、次の獲物を探し求めるのでは……？

## ティナもすごい美人だが……

この映画で観るオナシスの妻ティナは2人の子持ちとは思えないすごい美人だが、オナシスがこのティナと結婚したのはビジネス絡みだったよう。プレスシートによれば、ティナの父親は古参の海運業者だが、ティナとの結婚に際してオナシスは石油運送の権利譲渡書を嫁入り道具にさせたとのこと。

映画の中でも、「あの女と手を切らなければ離婚する」と迫るティナの姿や、「離婚することになれば、莫大な損失を受けることになるぞ」とオナシスに迫るティナの父親の姿を観ていると、このクラスの大物の離婚はとてつもない大変な話だということがよくわかる。しかしこの映画を観ている限り、オナシスがこんな美人妻と離婚してまでカラスと一緒にいたいと願ったのは、どうもホントにカラスを愛していたからのようだが、さてその真偽のほどは……？

## 恋の駆け引きは歌ほどでは……？

ティナとの離婚を願うカラスに対して、オナシスは「必ずそうするから、俺を信じて……」と甘い言葉をささやいて信用させていたのに、直接ティナから「私は離婚したいのに、拒否しているのはオナシスの方だ」と聞かされたカラスがキレたのは当然。私の見るところ、この段階で既に恋の駆け引きにおいては圧倒的にオナシスの方が上手で、カラスのそれは全然ダメ。少なくとも、あのすばらしい歌唱力には全然及ばないことは明らか。

そんなカラスの恋の駆け引きにおける第1の悲劇は、ティナと正式に離婚できたにもかかわらず、カラスは入籍しないオナシスをそのまま容認したこと。ここははっきり、「籍を入れてくれないければ、私への愛はインチキなもののみなして、あなたと別れる」と宣言しなくちゃ……。



そして、第2の悲劇は、世界にはカラスに匹敵あるいはそれ以上のターゲットが存在するという広い目を持ってなかったこと。すなわち、1963年11月22日のジョン・F・ケネディの死亡により未亡人となったジャクリーン（アンナ・ヴァッレ）へオナシスが接近したのは、1つはビジネス絡みだったが、もう1つは次の恋を求めるためであることは明らか。しかし、自分がただ1人オナシスを愛しているのと同じように、オナシスも自分だけを愛してくれていると信じたカラスはやはり甘い。その結果、現実に展開された次の恋模様は……？

## 恋と仕事の両立は……？

オナシスとジャクリーンの結婚が新聞に華々しく報じられたのは、1968年10月20日。これによって、カラスとオナシスとの不倫の恋と愛人関係は9年間で終止符を打つことになったわけだが、その間にカラスがオナシスの助言を受けて歌の世界に復帰していたのがラッキーだったことは明らか。カラスは入籍はしないものの、オナシスとの同棲生活が始まる中、歌を完全に捨てオナシスとの愛に人生のすべてを捧げると決意したのだが、オナシスの説得によって舞台に復帰してみると、それが意外に楽しかったよう。もっとも、かつての全盛時代とは異なる自分の声にカラスは違和感を覚えたようだが、それはある程度仕方のないもの……。そんな自分の力に対する不満はあっても、この時期に舞台に復帰していたため、ジャクリーンによってオナシスを完全に奪われてしまっても、その後1974年に完全な引退をするまで世界の MARIA・カ

ラスの名声を保つことができたのだから、本当に舞台への復帰は彼女にとって幸せだったはず。男はマリア・カラスを裏切ることがあっても、歌や舞台は裏切ることはなかったというわけだ。

2007年11月6日に観た『エディット・ピアフ 愛の讃歌』（07年）にみるシャンソンの歌姫エディット・ピアフの生きざまや恋模様と対比して、つくづくそう思った次第。それにしても、名曲が適度に散りばめられたこの手の歌姫たちの生きざまを見るのは、ホントに楽しいものだ。

## 他人の争いを覗くのは楽しいもの……？

この映画は描いていないが、他人の、しかも世界的な大富豪の死にざまや遺産争いを覗くのは意外に楽しいもの……？

そこでネット情報を調べてみると、あった、あった。2006年4月16日に放送された『知ってるつもり?!』の『大富豪を巡る女たち』にはたくさんの面白い情報が……。第1に、オナシスが1兆円といわれる遺産を残して死亡したのは1975年だが、それには1973年に長男アレクサンダーを25歳で失ったことの影響が大きかったよう。さらに1974年には、息子の死亡にショックを受けた前妻ティナもアルコール中毒の末に死亡。

第2に、オナシス帝国を受け継いだ娘クリスティーナとジャクリン夫人との間に遺産相続をめぐる紛争が生じたのは、オナシスが遺言によって病床にあるオナシスに寄りつかないジャクリンの相続分を少なくしたかららしい。

第3に、24歳でオナシス帝国を受け継いだ娘クリスティーナは、4度の結婚生活もうまくいかず、長年の薬物乱用による心臓発作によって37歳で死亡。そのため、クリスティーナの娘アシーナが3歳でその遺産を承継したとのこと。そのアシーナは2000年の放送当時15歳。

こんな何とも大変な一族のゴタゴタを見ると、おカネはあればあるほどいいもの、とは到底言えないことがよくわかるのだが……。

2007(平成19)年12月22日記